

## 図画工作科の教科書を活用する教員の思考 教科書に対する意識調査をもとに

寺元 幸仁

他の教科等と比較すると、図画工作科の教科書の使用頻度は低い。そこには、図工に対する誤解や無意識的な軽視など課題があると考え、本研究に取り組んだ。小学校教員（99人）を対象とした意識調査を実施し、教科書の使用頻度や活用方法、改善点などをたずね、回答内容を分析した。KHCoderを活用した結果、子どもの思いを重視し自由に表現させたいという「教員の図工観」と「掲示・出品作品制作優先」「保護者や同僚の評価のため」を優先する「教員側の都合」が存在することを明らかにした。同時に、子ども主体と教員主導の二つの思いの間でジレンマを感じながら、その解消に向け、何か具体的な取り組みをおこなっている教員がほばないことを今後の課題として挙げた。

キーワード：図画工作科，教員の二つの思い，子ども主体，教員主導，教科書

### はじめに

小学校では、令和6年度（2024）より新教科書が使われている。図画工作科においても同様であるが、他教科と比較して図工の教科書の使用頻度は低い。過去の教員対象の意識調査において、半数以上の教員が教科書の内容を3割程度しか活用していない結果と分かっている<sup>1)</sup>。

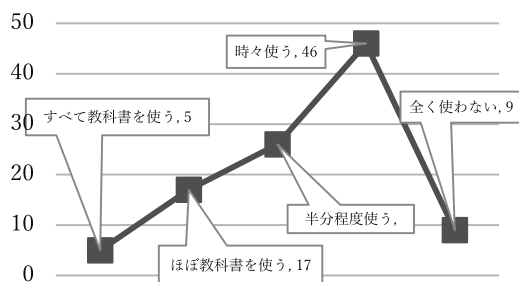
無償で配布され、使用義務のある教科書の使用頻度がなぜ低いのか。そして、活用されている場合、どのように活用されているのか。それは子どもの「学び」にどう影響するのか。教科書の活用について現状を明らかにすることで、図工を取り巻く改善すべき課題があるのではないかと考え、本研究に取り組んだ。

### 1 問題の所在

教科書は、我が国の未来を担う子どもたちの

表1 教科書の使用頻度(2014)

※数字:回答者数



ために、無償で配布されている。国語や算数など他教科は、教科書の内容に沿って授業がおこなれることが多いが、図工の教科書についてはその使用頻度は低い。この状況は、子どもの「学び」にどのような影響を及ぼすのか。

表1は、2014年に実施した意識調査（当時筆者が勤務していたA市内教員対象）の結果なのである<sup>2)</sup>。回答者の53%（55名）が「30%程度使用」、「まったく使わない」となっている。



教科書通り授業をすれば、学習内容を保障していることになるという単純な問題ではないものの、教科書の使用頻度が低いことは、学習内容をしっかり保障できていないのではという懸念が生じる。また、指導者の好みや主義主張によって教科書外の題材ばかりで良いのかという疑問も生まれる。

授業をデザインするのは教員である。教科書の活用についても、教員の図工に対する意識や教育現場の実体が深く関わっている。使用頻度の低い現状が、子どもの思いや「学び」とは関係なく、大人である教員側の都合ということであれば、そこには今後改善すべき課題がある。既に述べた教員対象の意識調査においても、教育現場では無意識的な図工軽視があるという結果が明らかとなっている。

## 2 これまでの研究と用語の整理

### 2-1 これまでの研究

阿部宏行は平成 27 年の調査において教科書題材についての調査を実施し、その使用頻度が低いこと、高学年になるにつれて使用頻度が下がっていくことを示している<sup>3)</sup>。また、筆者の調査では、使用頻度が低い現状と同時に、子どもの思いを大切に、自由な表現を保障しようとする指導観をもちながら、実際の授業では教員主導の作品づくりとなってしまうことへ疑問を抱く教員が多いとことを明らかにしている<sup>4)</sup>。教科書の使用頻度や活用方法について現状を把握する研究は見られるものの、具体的な活用法や活用するメリットやデメリットについての研究は近年見当たらない。

なお、今回の調査は教員の教科書に対する意識調査であるため、教科書を作成する側の研究者や教科書会社側の制作意図等は、分析・考察に入っていない。あくまで、教員側からの回答

をもとに論じている。

### 2-2 教員の二つの思い

一つ目の思いは、図工を子どもが自分の思いを自由に表現する教科だと考えている「教員の図工観」である。それぞれの子どもの自由性や主体性を保障する。活動過程も活動時間も子どもごとに異なり、作品の出来栄もそれぞれである。研修会等で図工について語るとき、この思いをもとに図工を語る教員に多く出会ってきた。本稿では、「教員の図工観」と示している。

二つ目の思いは、教員が図工の授業を実践する際に、優先している「教員側の都合」である。参観日など学校行事の掲示物や、毎年 50 を超える募集が届く展覧会やコンクールの出品作品づくりなど、子どもの思いや「教員の図工観」とは関係なく取り組まれている実践のことである。

筆者は小学校現場に勤めながら今日の図工の実践の多くが、子ども主体の図工を実践したいと考えながら、教員主導で授業をおこなわれていると考えている。

## 3 意識調査の設問

本研究では、筆者が勤務していた市内小中学校教員を対象に意識調査(表 2)を実施し、その回答内容から、教科書の使用頻度や活用方法、教員の二つの思いとの関連について分析・考察をおこなった。

設問 1～3 は、回答者の全体的な傾向をつかむために設定した。

設問 4 では、2014 年の調査結果と比較し、教科書の使用頻度と具体的な活用方法の変化を明らかにするために設定した。また具体的な活用方法の回答から、教科書を活用する意図が明らかとなると考えた。

設問 5 では、教科書を活用するメリットとデ



表2 意識調査の設問まとめ

## 教員に対するアンケート

- 1 小・中学生の頃をふりかえって、図工は好きでしたか。
- 2 教職員となってから、図工を指導することは好きですか。
- 3 教職員となってから、図工を指導することは得意ですか。
- 4 あなたは、図工の教科書をどの程度使用し、どのくらい活用していますか。
- 5 あなたが考える、教科書を活用するメリットとデメリットを教えてください。
- 6 S市の調査(2014)で、図工の授業において教科書が十分に使用・活用されていない教育現場の実態が明らかとなっています。なぜこのような状況が起きるのか、あなたが考えるその理由を教えてください。
- 7 昨年度の調査において、図工の授業は「子どもの思いを大切に表現する時間と考えながら、実際は教員が主導した作品作りの時間になってしまう」場合が多いことが明らかとなっています。なぜこのような状況が起きるのか、あなたが考えるその理由を教えてください。
- 8 「6」や「7」のような状況について、不安や疑問を抱き、改善したいと考えている教員が多いことも明らかとなっています。どうすれば「教員主導」の授業を脱却し、「子ども主体」の授業を実現できると考えますか。あなたの考えを教えてください。
- 9 その他、図工にかかわる、ご意見、不安や疑問があれば自由に書いてください。

メリットをたずねている。教員が教科書に対して求めている内容や図工に対する指導観を確認できると考えた。

設問6では、教科書の使用頻度が低い理由をたずねた。教員は教科書を使用しないことで、子どもにどのような影響があると考えているか

を明らかにしようと設定した。

設問7は、教員の図工観と実際の授業のずれが起る要因を明らかにしよう設定した。

設問8は、設問7を踏まえ、どう改善することができるか回答してもらった。

設問9では、図工にかかわる意見、日々の不安や疑問を自由に回答してもらった。自由記述にすることで、教員がどのような視点で授業や評価に取り組んでいるのか、日々の実践で抱えている思いが明らかとなると考えた。

## 4 調査・分析方法

2022年6月～2024年7月に筆者が勤務していたA市内小中学校教員250名を対象に「図工・美術教育における二つの思いについて」の意識調査用紙を配布した。回答数は111名(小学校教員は99名)であった。分析方法としては、回答内容を集計し、見取りやすく表にして考察する方法、自由記述をテキスト化し、KHCoder<sup>5)</sup>を用いて、出現回数の多い語句を抽出し、共起ネットワーク図を活用して各設問の代表的な回答を導き出し、分析・考察をおこなった。

## 5 結果分析・考察

## 5-1 回答者について

表3 アンケートに回答した教員の教職年数と図工指導年数 ※数字は人数

	初年	～5年	～10年	～15年	16年～
教職年数	3	14	26	16	34
図工指導年数	4	25	29	15	18

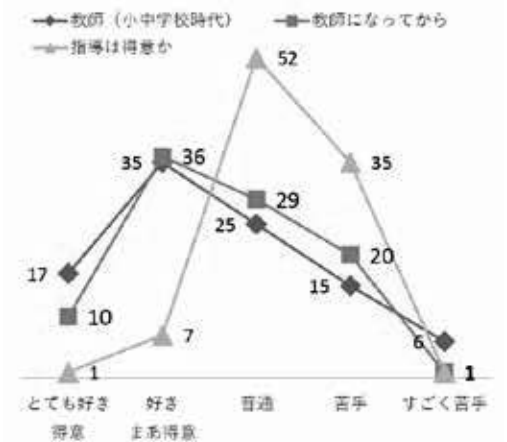
図工指導年数無回答2

表3は、回答者の教職経験や図工指導年数である。初年から16年以上と幅広い教員から回答を得ることができた。

表4は、設問1～3の回答をまとめ、グラ



表4 図工に対する印象と指導に対する印象  
※数字は回答数



フに示したものである。教員自身が子どもの頃をふり返った時の図工に対する好感度（◆）、教員になってからの図工に対する好感度（■）、教員となり図工を指導することに対する意識（▲）について回答をまとめている。

教員の図工に対する好感度は、回答者が子どもの頃と教員となってからを比較しても、大きな変化はなく、ほぼ一致している。しかし、指導するとなると、ほとんどの回答者が「普通」「苦手」「とても苦手」へ移り、回答者全体の4割が「苦手」「とても苦手」と感じていることがわかる。指導することを意識すると図工に対する苦手意識が強くなることがわかる。

5-2 教科書の使用頻度と活用方法（設問4）

表5 教科書の使用頻度（2024）  
※数字：回答者数

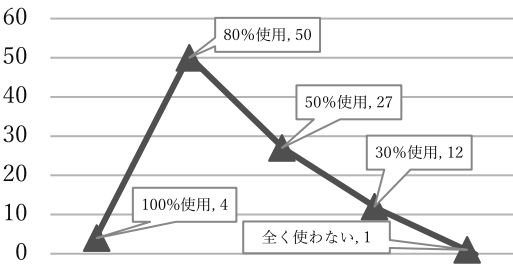


表6 教科書の使用頻度 ※数字は回答数

	子どもの学びを意識して活用	教員の指導を意識して活用	子どもと教員両方を意識して活用
事前	3 材料集め。	7 指導法。作品を参考。教材研究。	78 作品の参考。道具の使い方。安全面。めあて。イメージがしにくい時の見本。ワークシートづくり。単元の確認。美術史。題材選び。活動内容の確認。作品の例。
導入	98 イメージづくり。イメージをもたせる。学習の見通し。作品例。道具の使い方。見本。めあての確認。イメージしにくい子の例。	4 鑑賞	
展開	4 イメージがしにくい時に見本。		
終末			
事後			

表7 具体的な教科書の活用方法回答からの抽出語（数字は回答数）と共起ネットワーク図（数字は Jaccard 係数）

抽出語	抽出回数	抽出語	抽出回数	抽出語	抽出回数	抽出語	抽出回数
作品	25	確認	10	子ども	6	鑑賞	4
イメージ	20	導入	10	単元	6	工夫	4
教科書	12	使い方	9	内容	6	使う	4
見本	12	見通し	8	目当て	6	授業	4
見せる	11	指導	8	絵	5	斬る	3
見る	11	提示	8	活動	5	材料	3
道具	11	題材	7	作り方	5	方法	3
例	11	参考	6	活用	4		

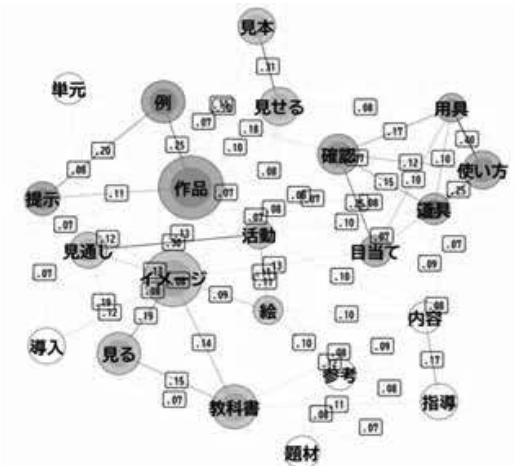


表5は今回（2024年▲）の教科書の使用頻度を調査した結果をまとめた表である<sup>6)</sup>。

2014年では回答者の53%（55名）が「30%程度使用」「全く使わない」であったが、2024年では回答者の57%（54名）が教科書を100%と80%程度使用しているという回答となっている。2014年から2024年にかけて、A市においては教科書の使用頻度が大幅に上昇している。その要因として2014年以降A市で取



り組んできた学習会や研修会が挙げられる<sup>7)</sup>。これは学習会参加者の事後の意識調査で明らかとなっている。

しかし、教科書に沿って授業を進める他教科と比較した場合、教科書の使用頻度はやはり低い。教員からの回答でも「他教科では教科書通りに授業を進めるのが基本だと感じるが、図工には感じない」という意図の回答が散見された。

回答者には、教科書の具体的な活用方法を書いてもらった。表6は、回答内容を「子どもの学びを意識して活用」「教員の指導を意識して活用」「子どもと教員両方を意識して活用」の3つに分類してまとめたものである。表7は、回答内容をテキスト化しKH Coderで使用頻度の高い語句を抽出し、上位の語句をまとめ共起ネットワーク図（数字はJaccard係数<sup>8)</sup>）に示したものである。

表6を見ると、多くの場合、授業の準備段階と授業の導入時に教科書が活用されている。準備や導入時に大きく偏っていることは図工における教科書の特徴的な活用方法であると言える。

回答内容を見ると、導入時の「子どもの学びを意識して活用」、準備の際の「子どもと教員両方を意識して活用」とともに、「イメージづくり」「作品づくりの見本にする」という回答が多い。表7の頻出頻度の高い語句の上位を見ても、「作品(25)」「イメージ(20)」「見本(12)」「見せる(11)」「例(11)」「道具(11)」「確認(11)」「導入(11)」などが並んでいる。

「作品(25)」の代表的な回答としては、「作品の例」「作品例の提示」などが挙げられる。「イメージ(20)」の回答には、「イメージをもたせる」「イメージづくり」などが挙げられる。「見本(12)」は「作品づくりの見本にする」、「見せる(11)」は「見通しがもてるように見せる」、「道具(11)」は「道具の使い方を確認する」、「導

入(11)」は「導入時に提示」などが挙げられる。

設問4の回答結果からは、導入の段階で子どもの活動内容の大半が決定している授業が多く、教科書は効率的に作品づくりを進めるために活用されていることが多いと言える。

この結果は、教科書の使用頻度が高いことが、必ずしも子どもの思いを尊重する方向に作用するとは限らないことを示している。

設問4の教科書の活用方法の回答から以下のような結果を導き出した。

- ・教科書の使用頻度は上昇。
- ・授業の準備、導入時に子どもに対して提示するために活用。
- ・教員の作品イメージや活動内容の効率的な伝達に活用。
- ・教員主導の授業のために使用頻度が上昇していることは課題。

### 5-3 教科書活用のメリット・デメリット (設問5)

#### (1) 教科書を活用するメリット

表8は、設問5の回答を、「子どもにとってのメリット」「教員にとってのメリット」「子どもと教員両方にとってのメリット」にまとめたものである。表9は、KHCoderにより抽出した頻出語句と共起ネットワーク図である。

「子どもにとってのメリット」の回答は、「活動のイメージがわかりやすい」や「目当てを確認できる」「見通しがもてる」など、導入時に活用するメリットが述べられている。「教員にとつ

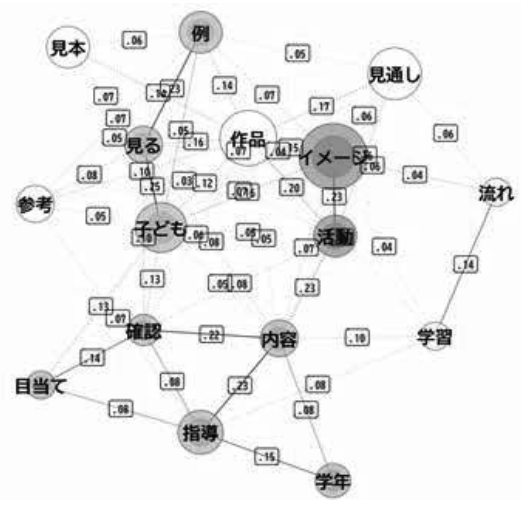
表8 教科書のメリット ※数字は回答数

子どもにとっての メリット	教員にとってのメリット	子どもと教員両方にとって のメリット
9 活動のイメージが わかりやすい。見通 しをもてる。学習 意欲が高まる。き っかけがつかま える。イメージが わからない子ども がやりやすくなる。 目当てを確認。	30 評価、時間短縮。カリ キュラムをつくる参 考。わかりやすく 説明。見本をつくら なくても良い。イメ ージをもたせ、見 通しをもたせる。 手帳。指導内容の 確認。目当ての確 定。教員が方向性 をつかめる。指導 要領に即した指導 ができる。	74 作品例。見通しが もてる。学習指導 要領に即している。 イメージをもつ。 目当ての共有。 アイデアをひらめ くヒント。視覚的 にわかりやすい。 作品や活動のイメ ージが共有できる。 段階的指導。慣 れが減る。多様な 活動や手法。解 説。活動内容の確 定。技法の確認。 用具の使い方。



表9 教科書のメリット回答からの抽出語  
(数字は回答数)と共起ネットワーク  
図(数字はJaccard係数)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
イメージ	23	例	9	目当て	4	真体	3
作品	16	見る	7	流れ	4	考える	3
見通し	14	参考	7	アイデア	3	作る	3
子ども	13	内容	7	活用	3	授業	3
指導	10	学年	6	共有	3	身	3
活動	9	確認	5	教員	3	題材	3
見本	9	学習	4	苦手	3	評価	3



てのメリット」の回答でも、教員は授業の事前準備や導入時の段階で教科書活用のメリットを感じている。

表9を見ると、「イメージ(23)」「作品(16)」などが見られ、設問4の回答と重なりが確認できる。代表的な回答としては、「イメージ(23)」の回答には、「イメージしやすい」「イメージがもてる」などが挙げられる。「作品(16)」の回答には、「目指す作品を見て確認」などが挙げられる。「見通し(14)」「活動(9)」では「活動の見通し」、「見本(9)」では「見本として活用」、「指導(10)」「確認(5)」では「指導する内容の確認」などの回答が見られる。

設問4の結果と同様に、授業の導入の際に教員が教科書を活用するメリットを感じていることがわかる。その活用方法が活動しにくい子どもへの支援になると考えている教員もいる。「苦手な子どもでも例を見ながら真似をしてと

りくめる」「自分でイメージをふくらませることが難しい子どもにとって、助けになる」などがそれに当たる。

設問4と重なる回答が見られる一方で、「時間の短縮」や「手軽」、「1から考えなくてもいい」や「見本をつくらなくても良い」といった授業の効率化に関わる回答が見られる。これらは、ややもすると、教員が題材を創作する工夫やその意欲の欠如を指摘される可能性をもつ回答である。

設問5から明らかにしたことを以下のようにまとめる。

- ・授業の事前準備や導入時にメリット。
- ・教員の作品イメージや活動内容を子どもに伝達。
- ・時間短縮・活動の効率化。
- ・教員主導で授業が、表現しにくい子どもへの支援となる。

(2) 教科書を活用するデメリット

表10は、意識調査設問5の教科書を活用するデメリットについての回答を、「子どもにとってのデメリット」「教員にとってのデメリット」「子どもと教員両方にとってのデメリット」にまとめたものである。表11は、KHCoderにより抽出した頻出語句と共起ネットワーク図である。

表10を見ると、メリットとは異なり、「子どもにとってのデメリット」が多く回答されて

表10 教科書のデメリット回答からの抽出語 ※数字は回答数

子どもにとってのデメリット	教員にとってのデメリット	子どもと教員両方にとってのデメリット
57 見本と同じものやよく似たものを作る。発想が広がらない。子どもの発想やアイデアが偏る。イメージを固定させる。真似してしまふ。興味、関心にそぐわない。同じものが仕上がる。教科書の写真の真似。実態に合わない。作業になる。	19 準備できない(予算、環境)。細かい指導法がわかりづらい。例年同じものになる。時数がたりない興味によりそいく。型にはまった指導。子どもに不満を言われる。自分の感覚とちがう評価の作品。やりにくい題材。あまりおもしろくないと感じる。実態に即していない。自由が制限。	12 イメージが固定。やりたい内容ができない。パターン化。自由にできない。行事や季節に合わせた事例がない。おもしろくない。考えが引く強られる。同じような作品を仕上げる。道具の使い方がわかりにくい。作り方が固定。



表 11 教科書のデメリット回答からの抽出語（数字は回答数）と共起ネットワーク図（数字は Jaccard 係数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
作品	23	アイデア	5	広がる	4	指導	3
子ども	12	イメージ	5	場合	4	制限	3
発想	11	似る	5	引っ張る	3	特に	3
教科書	7	自由	5	可能	3	学校	2
自分	7	真似る	5	固定	3	環境	2
真似	6	見本	4	作る	3	興味	2



いることがわかる。表 11 では、教科書を活用するメリットの回答と重なる語句が頻出語句として上位に挙げられている。「作品 (23)」や「子ども (12)」などである。「真似してしまう」「似たような作品ができてしまう」「イメージを固定させる」「子どもの実態に合わない」などである。

また、「発想 (11)」が増え、「イメージ (5)」が減少した点や、「自由 (5)」が、頻出語句として抽出されたことは、メリットとデメリットの回答の異なる点として注目したい。

「イメージ (5)」の代表的な回答としては、「イメージが固定してしまう」「イメージをふくらませることができず同じものが仕上がる」などが挙げられるが、これは「子どもと教員両方にとってのデメリット」にも挙げられる回答である。教科書を活用することは、教員自身の作品イメージや活動内容を固定させてしまうと考える教員が多い。

また「発想 (11)」「自由 (5)」の代表的な回答は、「自由な発想ができない」「発想が引っ張られる」などが挙げられる。教科書に掲載されている作品例や活動例により、子どもの自由な発想が制限されると考えている教員が多い。

「子どもの興味、関心にそぐわない」など子どもの思いを重視する教員の存在や「学校の実態に即していない」「指導の自由さが制限される」など、教科書を使うことに指導の不自由さを感じている教員もいる。

設問 5 の回答内容から明らかにしたことを以下のようにまとめる。

- ・メリットとは異なり、「子どもにとってのデメリット」についての回答が多い。
- ・頻出語句は、メリットと重なる。
- ・子どもと教員ともに、教科書によって、作品イメージや活動内容が固定。
- ・教科書を活用することで、不自由さを感じる教員がいる。

### (3) 設問 5 の分析まとめ

教員は、作品イメージや活動内容の効率的な伝達のために、教科書を活用するメリットを感じている。対して、子どもの自由な発想を大切に、子どもの実態に即した授業を実践するためには、教科書に掲載してあるイメージ写真や掲載作品が有効ではないと考える教員が多い。

#### 5-4 教科書の使用頻度が低い要因(設問 6)

ここでは、教科書の使用頻度が低い要因について教員の考えをたずね、回答を「子どもの学びを意識」「教員の指導を意識」「子どもと教員両方を意識」の 3 つに分類している。

表 12 を見ると、回答の多くが「教員の指導を意識」に集まっていることがわかる。表 13 では「作品 (20)」「題材 (15)」「子ども (11)」「指導 (11)」「時間 (8)」などが頻出する語句として抽出されている。「作品 (20)」の代表

子どもの学びを基盤	教員の指導を基盤	子どもと教員双方を基盤
10 作品例の真似になる。教科書通りにはいかない。おもしろくない。実態に即して使用しない。作品とみだりな作品が少ない。	108 案だから。カリキュラムとすれば。学給指導物の作品づくり(全面掲示の類)。人権本ストーリーと絵画展に出品する制作。教材キット(説明つき)。わかりやすい指導本。他にアイデア。教員の教えずやす。活用したい内容ではない。時間短縮(題材研究)。評価。研修が少ない。ICT機器の普及。教科書ではマンネリ化しやすい。似た作品になることを防ぐ。カリキュラムを守っていない。学習指導要領を理解していない。活用方法を知らない。広がりや深まりがない。おもしろくない。設定や材料が準備しづらい。しづらい。教員に創造力がある。質の高い教育が実践できている。これまでの経験。多忙すぎ。見栄えする作品制作。アートカードなど知らない。時間数がない。現実的でない。別の題材でいい。費用がかかる。自作題材が多い。使用義務の認識が薄い。準備物の不足。教員の不足。場所の不足。他教科と比較して軽視されている。指導の苦手な教員は避けたい分野。教科書を使ったことがない。	2 自由になりたい。思想が広げづらい。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
教科書	20	教員	6	実態	4	準備	4
作品	20	作る	6	評価	4	少ない	4
題材	15	多い	6	評価	4	場合	4
子ども	11	絵	5	描く	4	制作	4
指導	11	活用	5	不足	4	他	3
図工	10	見る	5	学校	3	説明	3
考える	9	見る	5	学習	3	提示	3
思う	9	自分	5	活動	3	年間	3
時間	8	授業	5	経験	3	方法	3
		キット	4	購入	3		

次に、「題材（15）」では、「他題材でも簡単

- ・学校行事や展覧会・コンクールを優先した作品制作。
- ・子どもの実態に教科書の題材が合わない。
- ・インターネット環境の整備により、教科書以外から題材を得る。
- ・図工の教材キット購入が慣習化。

設問7では、いまだ教員主導の授業が多い要因をたずね、回答を要因ごとにまとめ(表14)、KHCoderによって頻出語句を抽出し共起ネットワーク図で示した(表15)。表14を





見ると、教員の「図工観・指導観（45）」、同僚や保護者からの「教員への評価（16）」、「作品主義（14）」、「授業形態（14）」、「評価（11）」、「学校行事（11）」となっている。

「学校行事（11）」や「展覧会コンクール（2）」の回答は、挙げられていたが、教員の図工観や

指導観に教員主導の要因があるとする回答が多く挙げられた。この結果からは、教員の図工観と実際の授業のズレ（教員の二つの思い）に気づいている教員が多くいることがうかがえる。

また、子どもの思いが大切としながらも、同僚や保護者の「教員への評価（16）」や参観日等

表 14 教員主導の授業となる要因 ※数字は回答数

図工観・指導観	45	教員の固定概念。他の教科も教員主導。価値観の押しつけ。ある程度揃えないとテーマから外れる。教員の思いと子どもの実態のずれ。想定レベルまで到達させたい。指導しすぎ。失敗させないため。作品を完成させたい。ある程度の技術や技法は教える。「子どもの思いを大切に表現する」本質が理解できていない。「指導」のバランスの不理解。指導と支援のはき違え。「テーマ」を教員が決めるから。完成度を求める。教員が待てない。主導することで支援となる。子どもの意見の通りだと、お金や場所に困る。技術を身につけさせたい。イメージを広げる。基礎となるスキルを教えることも大切。教員の理想が強い。教員の主観的な感覚や感性が正解だという思い込み。大人の影響を受けている。日本の文化として枠の中で安全にという考え。
教員への評価	16	作品の出来で教員が評価される。見栄えを求める。参観日で保護者も見ると。掲示用の作品の差をつけたくない。別の教員が見る。目に触れるため。教材費を負担している保護者の手前、納得いく作品に整えたい。人と比べられるから。掲示を教員が気にしすぎ。
作品主義	14	見栄えを気にするから。教員が見栄えを求めている。完成度を求める。見栄えのよいものや大人のイメージに近づけようとしてしまう。出来ばえに差をつけない。教員の固定概念。
授業形態	14	時間が限られているから。授業時間内に終わらせるため。カリキュラムが決まっている。準備する時間がない。題材が増えている。時間数的に完成しにくい。
評価	11	評価を前提に指導。評価しないといけない。子どもの思いを重視すると評価の観点がわからなくなる。制作物で評価する。表面的な技術、完成度を評価しようとするから。
学校行事	11	掲示、展示を目的とした授業。参観日の提示物のため。見栄えのする作品を提示したい。ある程度の制作をさせなければという思い。参観日などを意識してしまう。参観日に保護者も見ると。
子どもの都合	9	子どもの実態が様々だから。子どもも見栄えを求めている。自分の思いや発想を表現する方法がわかっていない子どもが多い。制作に慣れていない子どもが多い。苦手な子どもが多い。自信がない子どもが多い。イメージを広げることが難しい子どもが多い。
教員勉強不足	8	準備不足。キットを購入する。指導力が浅い。子どもの発想に着火できていない。指導方法がわからない。評価のポイントがわからない。
教科書	3	教科書の作品がよすぎる。教科書と同じようにさせてしまう。教科書を目指す子どもの思いと離れたものになる。
展覧会 コンクール	2	作品展への出品作品制作。
子どもの環境	2	家庭環境やアレルギー対策により材料集めができない。教材費の負担。



表 15 教員主導の授業となる要因回答からの抽出語(数字は回答数)と共起ネットワーク図(数字は Jaccard 係数)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	34	作る	8	参観	5	求める	3
教員	24	完成	7	準備	5	技術	3
作品	24	考える	7	多い	5	経験	3
思う	14	思い	7	題材	5	制作	3
見栄え	13	保護	7	時間	5	大人	3
時間	12	取る	6	ある程度	4	力法	3
指導	11	準備	6	意図	4	増い	3
評価	11	授業	6	描く	4		
提示	9	テーマ	5	イメージ	3		
見る	8	結	5				



の展示物など「学校行事 (14)」を優先してしまふ教員のジレンマがうかがえる。

特筆すべき回答としては、「自分の思いや発想をうまく表現する方法がわかっていない子どもが多い」や「苦手な子どもが多い」、「自信がないと思う子どもが多い」など、教員主導の授業となる要因が子ども側にあるとする回答 (9) が挙げられている点である。

表 15 では、「子ども (34)」「教員 (24)」となっているが、「教員の主観的な感覚や感性が正解だという教えが子どもに影響している」「教員が予め想定している作品のレベルに子どもの実態が伴っていない」「教員が想定していた作品レベルにまで到達させたい」など、子どもの思いとのズレや教員の願望を優先することが、教員主導の授業となる要因とする回答も多い。「作品 (24)」「見栄え (13)」「評価 (11)」では、「作品展への出品」「見栄えがそこそこよい作品になってほしい」「子どもの作品の出来で教員が評価されるような雰囲気がある」「評価しな

いといけない」など、教員側の都合が要因であるとする回答も多い。

設問 7 の回答から、教員主導の授業が多くなる要因を以下のようにまとめた。

- ・学校行事や展覧会・コンクールの作品制作を優先する現状。
- ・教員と子どもの思いのズレ。
- ・教員の都合や願望を優先。
- ・子どもへの評価のみならず、同僚や保護者の教員への評価。
- ・表現することを苦手と感じ、自信がもてない子どもが多いと考えている教員の存在。

## 5-6 子ども主体の授業の実現方法 (設問 8)

設問 8 では、どうすれば子ども主体の授業を実現できるのか、回答者の考えをたずねた。

表 16 は、回答を内容ごとに分類したものである。「図工観・指導観の見直し、教員側の工夫 38」「教員の意識改革 (17)」「教員研修・学習 (14)」「子どもが選択・決定 (13)」「評価 (12)」に多くのか回答が当てはまる。これは、教員主導の授業となる場合、教員側に要因があるとする回答である。多くの場合、授業をデザインするのは教員である。「子どもが選択・決定 (13)」の回答のように、子どもの自由性や主体性を発揮できる箇所を多くし、子ども主体の授業を実践するためには、教員の意識の変容が必要であると考えている教員が多い。

表 17 は、KHCoder により抽出した頻出語句と共起ネットワーク図である。

「指導 (10)」の回答は、「技術は技術として指導し、それを活用するのは子ども」「指導するラインを明確にする」「必要な技術を指導した上で、その後は子どもにまかせる」など、教員が主導する範囲を決めておき、子どもが自由に活動する場面を保障しようとする回答である。また、「指導したい技法等を子どもたちが



表 16 子ども主体の授業を実現する方法 ※数字は回答数

図工観・指導観 の見直し、教員 側の工夫	38	材料の確保。場の保障。教科書を大切にする。図工のイメージをとらえなおす。アンケートを取る。指導した技術を活用するのは子ども。教員も楽しむ。造形遊びの充実。描く作る経験の充実。記録を残す。自由な制作の時間を設定する。一日図工の日。考え方をおしつけない。技能や知識は教える。簡単な題材。発想を交流し合う授業。教え込むのではなく問いかける。子どもが楽しめる題材。子ども主体のめあての設定。どんな力をつけるのか指導を明確にする。時間にゆとり。肯定的な反応や声かけ。準備と教材研究の時間を捻出。自由な発想で表現できる授業。経験を絵にする。子どものモチベーションをあげる。遊ばせる。目的と子どものずれ。他教科に比べ積み上げがない。
教師の意識改革	17	失敗を認める。教員も楽しむ。造形遊びに対する意識の転換。大人が口出ししない。作品をみんな受け入れる姿勢。実際に体験する。思いを感じ取る。準備をしっかりする。目標を明確に指導。学校全体で共有。教員によさを見つける目を育てる。海外の子どもの作品を見て衝撃をうける。教員が心がける。教員のみんなが同じように考え取り組むこと。
教員研修・学習	14	教員が教科書を読む時間を確保。研修。自己研鑽。海外の子どもの作品を見せる（教員も見る）。図工の研究授業を増やし、共有する。プロの授業（指導）を見る。「よい作品」とは？子ども主体の授業とは？
子どもが選択・ 決定	13	子どもに決めさせる。子どもに任せる。アンケートを取る。技術は指導し活用するものを子どもとする。自由が必要。子どもたちが発見していくような授業。子どもの創造力に任せる。子どもの意見を尊重する。「やりたい」を優先する。選択の幅。遊ばせる。
評価	12	評価を方法を変える。活動過程を評価する（ビデオ撮影）。評価をしない。作品をすべて受け入れる。記録を残す。第三者の視点で評価。作品を評価しない。評価にこだわらない。評価の観点を明確にする。個人の成長を評価する。
授業形態	9	時数の問題。子どもの思いを重視すると相当な時間がかかる。専科の配置。準備時間の確保。時間数のゆとり。時数を減らさない。
鑑賞	8	海外の作品を見る。子どもの思いを聞く。相互鑑賞。話し合い。幅広い鑑賞。見る力をつける。相互承認。鑑賞題材（アートカード）を使う。
学校行事・作品 主義・掲示	8	参観の為の図工脱却。掲示を意識しない。作品で優劣や見栄えを意識しない。掲示にこだわらない。作品で優劣や見栄えを意識しない。作品をみんな受け入れる姿勢。
子どもの環境	5	図工室の環境を充実。生活経験を豊かに。題材や資質を十分に確保。
子どもの意識を 変える	2	自由と勝手の違い。学級会を充実（意見を表現）。
展覧会 コンクール	2	コンクール主義から脱却。コンクールを気にしない。
他	2	答え方が難しい。

発見していくような授業」など、子ども自身が授業を進めている感覚をもちながら活動できるような授業の形態が望ましいという回答も見られた。

「評価（12）」の方法を変えることで、子

ども主体の授業が実現できると考えている教員もいる。「作品より、作っている時間、子どもが意欲をもって取り組んでいるかを評価すべき」「作品に評価をするのをやめる」という回答の背景には、作品主義的に授業がおこなわれてい

項目	回数	内容	回数	内容	回数	内容
予て	34	約束	8	準備	4	自身
作品	23	表現	8	力	4	受け入れる
授業	18	作る	7	お互い	3	準備
時間	15	考える	6	意識	3	設定
思っ	13	見る	5	律儀	3	透明
教員	12	発想	5	鑑賞	3	変わる
指導	10	思い	4	技術	3	方法
説く	9	主体	4	教科書	3	
評価	9	題材	4	経験	3	
自由	8	難しい	4	研修	3	



「子どもに任せる」「子どもの作りたいもの」「子どもが楽しく」「子どもが表現したもの」「子どもの実態」など、「子ども（34）」に活動を委ねる回答が多い。「作品（23）」の回答には、「作品で優劣や見栄えを意識しない」「作品をかざらないようにする」「参観のための図工・コンクールのための作品からの脱却」という回答が並ぶ。これまでも課題となってきた、作品主義的価値観の押しつけ、学校行事や展覧会・コンクール優先のカリキュラムを見直すべきだとする回答である。

だけでなく、その解消に向けた方向性が教員の中である程度一致することがわかった。

- ・教員の意識が変われば、授業が変化する。
- ・子どもの自由性や主体性が発揮される場を保障する。
- ・評価についてとらえなおし、評価の方法を変える
- ・学校行事や展覧会・コンクール優先の授業を見直す。

設問9では、ここまでの設問以外で、図工にかかわる不安や疑問などを広く回答してもらった。教員対象の学習会等で聞かれる参加者の図工に対する不安や疑問は、ここ10年の間、大きな内容の変化は見られない<sup>9)</sup>。表18は、回答を項目ごとに分類したものである。表19は、回答をKHCoderにかけ頻出語句を抽出したものと共起ネットワーク図である。

評価に自信がもてない教員の存在については、これまでの学習会等でも確認できたが、今回も同様の結果であった。

多忙を極める日々の中で、図工の評価について研修することよりも優先される仕事が多いというのがこれまでの調査結果である<sup>10)</sup>。本稿冒頭に示した教員対象の意識調査においても、受験にかかわる教科や配当数が多い教科、そ

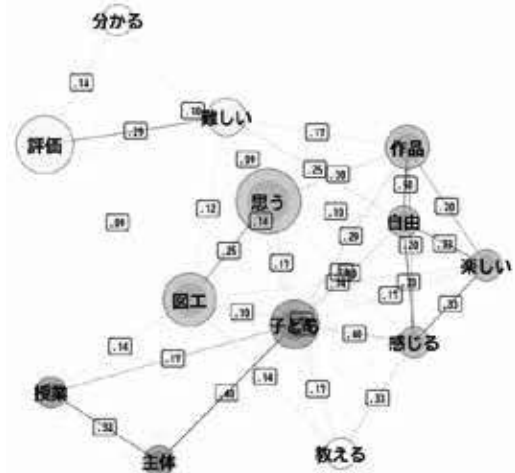


表 18 その他の回答分類表 ※数字は回答

指導観	7	よくわかっていない私が△△などと評価するのが不安。図工の評価がとて難しい。人によって違うのでは。どのように評価すべきかわからない。評価によって「図工は難しい」となっていないか。
授業	4	うまい図工の授業って？子ども主体の授業をみせてほしい。・道形遊びにやはり苦悩する。学習会等でアイデアを教えてほしい。
図工観	4	マンガやアニメのキャラクターをマネしているだけではもったいない。「自由」と言われると難しい。工作の材料集めが年々大変になってきている。新聞もとらない家庭等。
指導観	5	楽しいと思えるような図工・美術でありたい。家で自由に作品作っている方が楽しい子どもも多いのではない。子ども主体といいたがらも基礎・基本（用具の使い方等）はしっかり習得させたい。図工にかぎらず教育界の常識だと思われていることを見直すべき。自分の苦手意識が子どもの図工の好き嫌いに反映されるのでは・・・と感じる。たのしい、上手に教えられる！と思いたい。
支援方法	1	失敗したと思う作品をどうするのか・・・どうすればよいでしょうか。
ジレンマ	1	必ずしも作品展（展示したり展示したり）の必要はないと思うが、周りに合わせないといけないこと。
他	5	（本意疎遠）に○○△△丸々となって取り組んだ。夢中になればと思います。ありがとうございます。これからも頑張ります。しっかりと勉強しなければと思う。

表 19 その他の回答からの抽出語（数字は回答数）と共起ネットワーク図（数字はJaccard 係数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	9	作品	4	教える	2
評価	7	難しい	3	自由	2
子ども	6	楽しい	2	主体	2
図工	6	感じる	2	授業	2



の時々で注目されている教科や領域の研修は熱心に取り組まれるが、図工は後回しにされやすいことが明らかとなっている。

「指導観 (5)」にかかわる、「図工だけにかぎらず教育界のやるべきをなくし常識だと思われていることを見直すべき」という回答は、作品主義的評価や学校行事や展覧会・コンクール優先のカリキュラムなど、教育現場で慣習化された「普通」が背景となっていることがうかが

表 20 意識調査まとめ

<b>Q4 教科書の活用方法</b>	
・使用頻度は上昇・使用義務に対する意識が低い・授業の準備、導入時に活用。・教員の作品イメージや活動内容の効率的な伝達・教員主導の授業のために教科書の使用頻度が上昇	
<b>Q5 教科書を活用するメリットとデメリット</b>	
<b>メリット</b>	<b>デメリット</b>
・準備や導入時にメリット・作品イメージや活動内容を効率的にイメージ・教員主導は子どもへの支援となる・授業の効率化	・子どもにとってのデメリットが多い・頻出語句は、メリットと重なる・作品イメージや活動内容が固定・教員が不自由さを感じる
<b>Q6 教科書の使用頻度の低さの要因</b>	
・学校行事や展覧会・コンクールを優先・実態と教科書はズレ。・インターネット環境・図工の教材キット購入が慣習化。	
<b>Q7 教員主導の授業となる要因</b>	
・学校行事や展覧会・コンクールを優先。・教員と子どもの思いのズレ。・子どもへの評価と同僚や保護者の教員への評価。・表現することに自信がもてない子どもが多い	
<b>Q8 子ども主体の授業のための取り組み</b>	
・教員の意識を変える・自由性や主体性が発揮される場の保障・評価の方法を変える・学校行事や展覧会・コンクール優先の授業の見直し	
<b>Q9 その他、図工について不安や疑問</b>	
・多くの教員が評価について不安や疑問。・学校行事や展覧会・コンクール優先への疑問・研修会等の持ち方の見直し	

える。「たのしい、上手に教えられると思いたい」という回答は、図工の指導に対する苦手意識が背景となっている。

図工に対する不安や疑問をたずねた設問9では、これまでの学習会等の事後アンケートで得られた結果と同様の結果が得られた。

また、教員が抱える不安や疑問が2014年度から市内で研修会や学習会を積み重ねてきながら、変化が見られなかったことから、これまでの学習会等が教員の不安や疑問を解消するまでには至らなかったという反省点も浮き彫りとなった。

設問9の回答から明らかになったことを、以下のようにまとめた。

- ・評価について不安や疑問を抱く教員が多い。
- ・学校行事や展覧会・コンクール優先のカリキュラムに疑問を抱く教員の存在。



- ・これまで取り組んできた学習会等では、図工に対する不安や疑問を解消するまでには至らない。

## 6 総合考察と今後の課題

表 20 は、これまで示してきた設問ごとの結果を整理したものである。

A 市における教科書の使用頻度は高くなっているが、効率的なイメージの伝達に活用されることが多く、教員主導の授業実践のために活用されている側面が強い。そのため、教科書の使用頻度が上昇したことが、学習指導要領で保障しようとしている子ども主体の授業に必ずしもつながっていない。

また、今回教科書に沿って授業が展開される他教科と比較した場合、図工では題材相互の系統性への意識は低いことが明らかとなった。題材を設定する際に、系統性よりも成果物の出来ばえや教員の成功体験が優先される。ネット社会の広がりに伴い、題材を簡単に入手することができるようになったことも、教科書の使用頻度が低い要因の一つである。

自身が二つの思いの存在とそのジレンマに気づいている教員も多い中、子ども主体の授業の実践のためには、それらの要因を直視し解消に向け教員の意識の変容が必要だと考えている教員も多い。しかし、実際に取り組まれていることは少なく、日々の実践の中で抱えている不安や疑問が共有される機会も少ない。

受験にかかわる教科や時代ごとに注目される学習内容が優先され、図工については後回しにされる状況が長く続いている。そこには

無意識的に図工を軽視している教員の意識があると考えている。

ここまで今回の意識調査の回答について考察を進めたが、結果を踏まえ今後の課題としては、

以下の 2 点を挙げる。

1 点目は、「図工に対する教員の意識の変容」であり、一番重要な子どもの思いを横に置いてしまっている授業が未だに多いという結果からである。2 点目は、教員の意識変容のために「図工についてとらえなおす機会を具体的に設定」することである。教員の二つの思いに気づきながら、それらジレンマ、日々の不安や疑問を共有するなどの具体的な取り組みを行っている教員は少ない。また、図工の研修会等を開催したとしても、参加者の多くが図工関係者で、その他の教科等が優先されることが多い。教員も主体的に図工について問い返す機会をもってほしいところであるが、きっかけとしてその機会を具体的に設定することが必要な状況であると考えている。

## おわりに

今回の調査で筆者の勤務地である A 市では、教科書の使用頻度が著しく上昇している状況が明らかとなった。2014 年以降、地道に取り組んできた学習会や研修の成果として喜んでいたが、手放して喜べない事実気づくことができた。

教員の指導観の転換が求められてすでに 45 年以上が経つ。教科書の内容も変化し、子ども主体の授業を意識したものとなっている。しかし、それらを活用したとしても、子どもの思いを軽視し、教員側の都合によって活用したのであれば、その授業はやはり教員主導の作業的な授業となってしまうだろう。

今回の調査によって、教科書の活用頻度の上昇だけではなく、その活用方法がやはり重要であると再確認することとなった。

本研究も含め、教育現場の子どもや教員の声から課題を取り上げ、教育研究を進めていくこ



とは、図工について改めて問い返す重要な機会となる。今後も、教育現場の「声」を大事にし、継続して教育研究に取り組んでいきたい。

#### 【註】

- 1) 寺元幸仁『教師と学生「図工・美術実態把握アンケート」調査結果報告書』2015.3, pp.18-21.「平成25年度兵庫教育大学大学院同窓会研究助成金制度」を活用して2013年10月から2014年2月に行ったアンケートである。兵庫県A市小中学校教員333名(回収181名,回収率54%),市外小中学校教員65名(回収22名,回収率34%)と兵庫教育大学学生・大学院生80名(回収49名,回収率61%)。図工・美術教育の実態を客観的に把握する事を目的に取り組んだ。
- 2) 寺元幸仁『教師と学生「図工・美術実態把握アンケート」調査結果報告書』2015.3, pp.120-125.  
令和3年6月から8月の間に87名の小中学校教員に回答してもらった「教師の図工観と実際の授業」についての意識調査。
- 3) 阿部宏行「なぜ『造形遊び』は定着しないのか?」『芸術・スポーツ文化学研究2』大学教育出版,2016.3.31, pp.65-85.
- 4) 寺元幸仁『教師と学生「図工・美術実態把握アンケート」調査結果報告書』2015.3, pp.120-125.
- 5) KH Coderとは、立命館大学准教授樋口耕一氏等が開発したテキスト型(文章型)データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している。
- 6) 前掲註1)と前掲註2)の調査を比較。
- 7)「兵庫教育大学平成25年度課外プロジェクト

助成金制度」を活用し行った教員対象学習会。第1回2013.9.2 A市,参加者:小学校教員19名,内容「ミニ工作,意見交流」,第2回2013.11.2 兵庫教育大学,参加者:小学校教員11名・学生11名,内容「ワークショップ,意見交流」,第3回2014.1.6

A市,参加者:小学校教員16名・幼稚園教員1名,内容「版画体験,意見交流」,第4回2014.2.23 A市,参加者:小学校教員13名・学生7名,内容「ワークショップ,グループ討議,意見交流」。これらの学習会をはじめとして、A市において筆者を中心に図工・美術教育にかかわる学習会や研修を多数開催してきた。

- 8) Jaccard 係数は語が共起しているかどうかを重視する係数であり、1つの文書の中に語が1回出現した場合も10回出現した場合も単に「出現あり」と見なして、語と語の共起をカウントする。Jaccardの類似性測度は0から1までの値をとり、関連が強いほど1に近づく。この係数には、どちらの条件にもあてはまらない0-0の影響を無視するという特徴がある。
- 9) 前掲註7)の学習会事後アンケートでは、毎回、図工に不安について記述する欄を設定している。2013年から現在に至るまで、記述内容に大きな変化は見られない。
- 10) 前掲註1), pp.8-14.において、学校行事や展覧会・コンクールの作品作りや受験にかかわる教科が優先され、図工にかかわる内容は後回しにされたり、取り組まれなかったりする教育現場の状況について示した。



**Teachers' thoughts on using art and craft textbooks :  
Based on a survey of attitudes towards textbooks**

Yukihito Teramoto

Compared to other subjects, “art and craft” textbooks are used less frequently in class. The author undertook the present study as he believed that there were problems such as misunderstandings about art and craft and unconscious disregard for art. A survey to 99 elementary school teachers was conducted to ask about the frequency of textbook use, how they use it, and possible points for textbook improvement, and their responses were analyzed. Using KHCoder, it was found that there is a “teacher’s view of art and craft” that values children’s thoughts and allows them to express themselves freely, and a “teacher’s convenience” that prioritizes “the creation of works for school displays or exhibition competitions,” and “the evaluation of parents and colleagues.” In addition, the author points out that there are almost no teachers who are taking concrete steps to resolve the dilemma between the two views of child-centeredness and teacher-initiative, which should be a future issue to discuss and solve.

**Keywords:** Arts and Crafts Course, Teacher’s double standard, Child independence, Teacher initiative, Textbook